

昔むかし、あるところに、ひとりのおかあさんが、三人の娘と赤ん坊といっしょに暮らしていました。

ある日、おかあさんは、市へ出かけていきました。帰りが遅くなり、夜中になってしまいました。すると、とちゅうの山の中で、とらに会いました。とらはおかあさんを食べようとおそいかかってきました。おかあさんは、恐ろしくて、

「どうか、わたしを食べないでくれ。わたしより、うちで留守番をしている子どもたちのほうがずつとおいしいよ」といってしまいました。とらは、

「ふうん。おまえの子どもはなんていう名前だ」とききました。

「日順ヘスン、月順タルスン、星順ビョルスンだよ。赤ん坊にはまだ名前はないよ」

それを聞くと、とらはすぐにおかあさんの家へ行きました。そして、戸をたたいていいました。

「日順ヘスンや、月順タルスンや、星順ビョルスンや。帰ってきたよ。早く戸を開けておくれ」

その声がおかあさんの声とは違ったので、子どもたちは、

「ほんとうにおかあさんなら、手を見せてちょうだい」といいました。とらは、戸のすきまから手をさし入れました。子どもたちはその手を見て、

「どうしてこんなに黄色い手なの」とききました。とらは、

「おばあちゃんの家で壁ぬりを手伝ったんだよ。だから黄色いんだよ」と答えました。子どもたちは、

「そんなら、足を見せてちょうだい」といいました。とらは、こんどは足をさし入れました。子どもたちは、

「どうしてこんなに黒い足なの」とききました。とらは、

「おばあちゃんの家でぶたれたんだよ。それであざになったんだよ」と答えました。子どもたちは、ほんとうにそうなんだと思って、戸を開けました。

おかあさんに化けたとらは、うちに入ると、子どもたちに、

「赤ん坊をおよこし」といいました。そして、赤ん坊をだいて台所に行き、障子しょうじを閉めてしまいました。

しばらくすると、台所から、ポリポリ、ポリポリ何かをかじる音がしました。子どもたちは、

「おかあさん、ひとりで何を食べてるの。わたしたちにも少しちょうだい」といいました。けれども何もくれません。そこで、障子の穴からのぞいてみると、いっぴきのとらが赤ん坊の指の骨をしゃぶっていました。子どもたちは恐ろしくて、なんとかして逃げだそうと考えました。そこで、

「おかあさん、便所に行きたくってしょうがない。ちょっと行ってきていい」とたずねました。とらは、

「いいや、だめだよ」といって、行かせてくれません。

「じゃあ、うらの戸口の垣根の所でやってもいい」ときくと、

「ああ、いいよ」といったので、子どもたちはうらの戸口から逃げだしました。そして、井戸のそばの高い木の上に登っていきました。

子どもたちがなかなかもどってこないの、とらは、子どもたちを探しに、うらの戸口から出ていってみました。すると、井戸の中に三人の姿が映っているのが見えました。見あげると、そばの高い木の上に子どもたちがいます。とらは、

「日順や、月順や、星順や。おまえたち、そんな高い所へどうやって登ったんだい」とききました。子どもたちは、

「おばあちゃんのうちに行つて、ごま油を借りてきて、それを木にぬって登つたのよ」といいました。とらは、ごま油を借りてきて、木にぬって登りはじめました。ところが、油ですべって登れません。とらは、

「日順や、月順や、星順や。いったいどうやったなら登れるんだい」とききました。すると、星順が、

「おばあちゃんのうちに行つて、おのを借りてきて、木の幹に段々を作つて登ればいいのよ」といいました。とらは、おのを借りてきて、木の幹に段々を作つて登りはじめました。とらは、どんどん登ってきます。子どもたちは神さまにお祈りしました。

「神さま。どうか、わたしたちに、銀のかぼちゃのつるを下ろしてください」すると、天から、銀の綱がするすると下りてきました。子どもたちが綱をにぎると、綱はずんずん天に向かってあがっていきました。とらは、木の上から子どもたちにききました。

「日順ヘスレや、月順タルスレや、星順ビヨルスレや。おまえたち、どうやってそんなにのぼれるんだい」  
「神さまに、くさったかぼちやのつるを下ろしてくださいってお祈りしたのよ」  
そこで、とらは

「神さま、どうか、わたしに、くさったかぼちやのつるを下ろしてください」といいました。すると、天から、くさった綱がずるずると下りてきました。とらが綱をにぎると綱はずんずんあがっていきましたが、とちゆうまで来るとぶつんと切れてしまいました。

とらは、井戸に落ちて死んでしまいました。

天にのぼった娘たちは、日と月と星になったということです。

資料 『朝鮮民譚集』孫晋泰著／勉誠出版

村上郁 再話

